

ヴィルヘルム・フォン・シヨルツの『ペルペトウア』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000089

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ヴィルヘルム・フォン・ショルツの『ペルペトウア』について¹

志村 恵

0. はじめに

ゲッダが『歴史と科学から見た双子』の中で、「神秘的な出来事とオカルトが中心的役割を果たす物語の中で、双子の心理についてすばらしい表現をなしている」²と評したヴィルヘルム・フォン・ショルツ (Wilhelm von Scholz, 1874-1969)³の長編小説『ペルペトウア』⁴は、15世紀から16世紀にかけての帝国都市アウグスブルクを舞台とし、一卵性双生児の数奇な運命を物語るものである。

「わたしはこれからカタリーナおよびマリア・ブライテンシュニットという双子の姉妹の運命について語りたいと思う。この姉妹については二人の故郷アウグスブルクにおいて、15世紀から16世紀にかけての世紀転換期に人々の口の端に上り、また長らく記憶にとどめられた。姉妹の運命は全くもって驚くべきもので、人々はあれこれと考えを巡らせることになった。一人は平和の門修道院の院長として天寿を全うしたが、その静かながらも精力的な行状だけではなく、様々な奇蹟によって生前から聖女として崇められていた。もう一人は、比較的若い日に、魔女として火刑の薪の上でその生涯を終えた。」(7)

この小説は、そのオカルト的な雰囲気もあつてか、1928年には第45刷(11,000から16,000部)を数え、戦後の1949年には発行数が95,000から100,000部に達し、これに別版のドイツ図書組合(Deutsche Buch-Gemeinschaft)による廉価版を

¹本稿は、日本独文学会北陸支部研究発表会(新潟大学・2003年11月15日)において口頭発表した原稿に加筆・修正したものである。

²Luigi Gedda: *Twins in History and Science*. Springfield 1961, S.12

³ショルツは、たとえばナチ時代に自己犠牲の鏡としてもはやされた、日本の戦闘機乗りを題材にしたノヴェレ『責務』(Die Pflicht, 1932)の発行部数が、10年後には15万部に達するほどの人気作家だったが、現在では、ドイツ語圏においてもほとんど忘れ去られた存在である。ときおり、ナチへの協力という観点から批判的に語られるだけで、その作品が読まれることはほとんどない。ナチ側からの評価に関しては、たとえば Peter Aley: *Jugendliteratur im Dritten Reich. Dokumente und Kommentare*. Gütersloh 1967, S. 129f. 参照。ショルツの略歴に関しては、拙論「ヴィルヘルム・フォン・ショルツのドロステ理解」In: 『独文研究室報』15(金沢大学独文学研究会)2000年、25-32頁参照。

⁴Wilhelm von Scholz: *Perpetua. Der Roman der Schwestern Breitschnitt*. Leipzig 1926. 以下引用は、改訂版である 37-45. Auflage der Gesamtausgabe. Leipzig (Paul List Verlag)を使用し、カッコ内にその頁数のみ記す。

合算すれば、当時としては相当読まれた小説と言えよう⁵。本論文では、この作品を「ペルペトゥア殉教伝」、「魔女裁判」、「双子」という三つの観点から考察したい。

1. ペルペトゥア殉教伝

ショルツの『ペルペトゥア』は、ペルペトゥア殉教伝⁶をそのまま小説に仕立てたものではない。しかし、幻視 (Vision) および殉教への熱情で有名なこの殉教伝のイメージアリーに強く彩られていることも確かである。本章では、この幻視と殉教への情熱を中心に論を進めたいと思う。

ペルペトゥア殉教伝は、紀元 203 年 3 月 7 日に、北アフリカ・カルタゴ近郊で殉教したペルペトゥアについての、本人の手記とされる部分をも含んだ殉教伝である。また、殉教のいきさつと処刑の描写だけではなく、ペルペトゥアが見たとされる 4 つの幻視を描いていて、後代、グノーシス主義やモンタヌス主義との関連が取りざたされた。さて、アットウォーターの『聖人事典』に従えば、「四人の男性の同志たちと一緒に聖ペルペトゥアと聖フェリチタスの受難は、おそらく、初期の殉教者たちの真正な物語の中で最も感動的で最も印象的なもの」⁷であり、ペルペトゥア殉教伝は殉教伝の中でも人気の高いものに属する。ペルペトゥアの殉教はウォラギネの『黄金伝説』⁸にも収録されているほか、現在でもアイコンが販売されるなど一定の人気を保っているという⁹。その理由としては、ペルペトゥアの殉教が具体的な殉教日の特定されるごく初期のケースだったことや、ペルペトゥアの壮絶な殉教のあり方、殉教者自身の手記とされた部分の伝承など様々に挙げられるが、教父との関係も忘れてはならない。すなわち、ペルペトゥア殉教伝はある時期までテルトゥリアヌスの手によると考えられていたし、アウグスティヌスもこの殉教に感銘を受けていたからである¹⁰。また、幻視との関係で言えば、ペルペトゥア殉教伝は神

⁵ Walter Killy (Hrsg.): Literatur-Lexikon. Autoren und Werke deutscher Sprache. Bd. 10. München 1991, S. 366.

⁶ 「聖なるペルペトゥアとフェリキタスの殉教」(土岐正策訳) In: 『キリスト教教父著作集 22 殉教者行伝』教文館、1990 年、77-95 頁。

⁷ ドナルド・アットウォーター他: 『聖人事典』(山岡健訳) 三交社、1998 年、364 頁。

⁸ ヤコブス・デ・ウォラギネ: 『黄金伝説第四巻』(前田敬作他訳) 人文書院、1982 年、339-343 頁。

⁹ 豊田浩志: 『ペルペトゥア殉教者行伝』をめぐる一考察 — 「幻視」を中心に — キリスト教史学会第 52 回大会 (2001 年) 口頭発表。

¹⁰ たとえば、『説教』(Sermo) 280・1 の「ペルペトゥアとフェリキタスの殉教記念日に」(In natali martyrum Perpetuae et Felicitatis)。

学者や古代史研究者だけではなく、古代人の見た夢の記録として、たとえばユング派の興味を引き、フォン・フランツは『アイオン』の中でペルペトゥアの幻視についての解釈を試みている¹¹。さらに、文学作品への素材提供という点でも後世への影響は古代を越え、9世紀のノトカー(Notker der Stammler)やバロック殉教劇、さらには近代にまで至っている¹²。20世紀に入ってから、たとえばツァーン(Ernst Zahn, 1867-1952)の短編小説『ペルペトゥアの日』(Der Tag der Perpetua, 1912)やドミニコ会の修道士だったシュピーカー(Rochus Spiecker, 1921-68)の戯曲『ウィビア・ペルペトゥア』(Vibia Perpetua, 1963)がある。

当時ローマ帝国内では、すでにキリスト教徒である者の信仰の自由は一応保護されていたが、202年、皇帝セプティミウス・スウェルスによって出された勅令によって、新たにキリスト教徒となることが禁じられた。この勅令によって、洗礼志願者ペルペトゥアは、妊娠中のフェリキタスや他の四人の男性と共に逮捕されることになった。そして収監直後、彼女は天の梯子の幻視を見た。また、野獣による死刑という判決を受けた後も、彼女は幼くして亡くなった弟ディオクラテスについての幻視を二つ見る。さらに、棄教させて娘の命を救おうとする父親による三度目の「誘惑」¹³を退けたあと、彼女はエジプト人戦士に扮したサタンを打ち負かす第四の幻視を見る。処刑は判決どおり野獣によるもので、彼女は若い牝牛の前に連れ出された。彼女は牝牛に投げ倒されても、殉教の意志をさらに固め、身だしなみを整えさせたという。その姿に感動した観衆は、彼女たちに苦しまずにすむ剣による処刑を許した。その際、彼女は一撃目を失敗した未熟な執行人の剣を自らの喉に導き、殉教したのであった。これについて殉教伝記者は、「けがれた霊によってすら恐れられていたこの女性は、自らの意志によってでなければ、多分殺されることはあり得なかったであろう」¹⁴と評している。

ペルペトゥア殉教伝で重要なのは、幻視と殉教への熱情あるいは死への願望¹⁵で

¹¹ M.-L.フランツ「ペルペトゥアの殉教 心理学的解釈の試み」In: C.G.ユング・M.-L.フランツ:『アイオン』(野田倬訳)人文書院、1990年、299-373頁。

¹² Peter Habermehl: *Perpetua und der Ägypter oder Bilder des Bösen im frühen afrikanischen Christentum. Ein Versuch zur Passio Sancta Arum Perpetuae et Felicitatis*. Berlin 1992, S.1f.

¹³ 誘惑は、イエスに対する「荒野の誘惑」(マタイ4章他)も含め、聖人伝に頻出するモチーフであるが、『ペルペトゥア』においては、フーンシルトとトゥルナーによる誘惑(18、19章)が大きな役割を果たしている。

¹⁴ 「聖なるペルペトゥアとフェリキタスの殉教」、94頁以下。

¹⁵ 豊田:「殉教者と北アフリカ『ペルペトゥアとフェリキタス殉教者行伝』を読み解くために(1)」In:「上智史学」46(2001)、38頁。

あるが、ショルツの『ペルペトゥア』においては、この二つが双子姉妹のそれぞれに振り分けられている。つまり、幻視はカタリーナに、殉教への熱情はマリアへと特化されているのである。以下では、初めにカタリーナと幻視との関係を、次いでマリアと殉教熱との関係を見る。

この小説の主人公は、後にカタリーナ=ペルペトゥア¹⁶となるカタリーナであるが、まずこのカタリーナという名前自体、幻視と密接な関係を持っている。すなわち、カタリーナという名をもつ6人の聖人の一人、ボローニャのカタリーナ（15世紀）は、幻視により聖女に列せられたのである。

さて、カタリーナは幼少の頃から、父母のなくしたものを見つけたり、樹上の小鳥がやってきて肩に止まるなど不思議な力を持っていた。しかし、本格的な幻視をみたのは、マリアが重病に罹ったため、さらなる感染を恐れた両親がカタリーナを叔母に預けたときであった。つまり、彼女は叔母の家にながら、マリアと一体化し、マリアに対する終油のためにやってきた司祭と両親の様子を見、さらには彼らと一緒にマリアの回復を祈ったのであった。

「カタリーナはぞっとした。というも、月の薄明かりの中、自分が自宅の自室、それもマリアのベッドに寝ているのに気がついたからである。（中略）カタリーナはマリアのベッドに身動きもできず、じっと横になっていた。目も開けることができなかった。しかし、彼女はまぶたを通して色々なものを見た。つまり、父母に続いて司祭が部屋に入ってきて、手を伸ばして額に触れる様子などを見たのであった。（中略）彼女は父母と司祭の後ろに連なって跪いた。やがて、司祭は立ち上がり、『どうやら良くなってきたようだ。息づかいが落ち着いてきたから』と言った。」（68f.）

こうした幻視は、特に自意識が成長するにしたがって強まり、カタリーナが両親の家を出て自立した後は、たとえば修道施設「魂の家」に関する遺言状のありかを言い当てたり（15章）、精神病患者を癒したりする（16章）。もちろん、こうした能力は悪魔的存在であるトゥルナーとフーンシルトにとっても大きな魅力であり、二人はカタリーナを自分たちの陣営に取り込もうと画策する。しかし、後述のように恋敵アンナへの魔法攻撃のさなか今一步のところまで踏みとどまり、カタリーナは魔

¹⁶ 混乱を避けるため、「マリア=ペルペトゥア」（234）という本文中の表記にならって、入れ替わり以前と以後のペルペトゥアをそれぞれマリア=ペルペトゥア、カタリーナ=ペルペトゥアと書き表す。

女裁判の過程においても二人の誘惑を退けるのである。そしてその際、彼女自身の支えとなったのもまた幻視であった。すなわち、彼女は幻視によって自分の運命および使命を見ることで、迷い疑いつつも正しい選択へと導かれていくのである。

「すると聖母マリアは優しく答えて言った。『お前に課せられているのは死ではなく、命です。お前は永遠の父なる神によって、人々に善をなし、祝福と助けを与えるよう定められているのです。』」(329)

「聖母マリアは答えた。『身体の苦しみは小さい。私はお前の感覚をなくして、苦しみの力からお前を救うつもりだからです。むしろ、心の苦しみの方が大きいでしょう。お前にとって自分自身よりも大切な人、お前よりもずっと純真人が、お前のために死ぬからです。』」(331)

こうして、カタリーナはマリアの犠牲の後、修道女カタリーナ=ペルペトゥアとなり、さらに強まった幻視を使ってアウグスブルク市をペスト禍から守り(23章)、司教の甥や皇妃の命を救う(24, 25章)。

次に、マリアに体現された殉教熱についてまとめておきたい。『ペルペトゥア』においては、マリアによる自己犠牲の死の必然性について読者を説得するためか、いたるところでマリアの自己犠牲・殉教への熱望¹⁷について言及されている。それらによると、マリアの殉教熱は幼少のときから顕著であった。

「学校で聞かされる殉教物語や救い主の十字架上の死などが、この子に生き生きとした印象を与えた。そもそも死というものが、彼女にとっては栄光なのだった。彼女にしてみれば、死は滅亡というより、むしろ解放された上昇というべきものであった。彼女はこうした考えに夢中になった。」(49)

こうした願望は修道院に入ってからさらに強まり、強固な意志として形成される。

「その時、ジビユの宿命に思いあたり、マリアの中には、他者の生に仕え、自己を犠牲にするという心からの衝動が生じたのであった。」(103)

「それからこの新任の修道女は同僚に言った。『私は他人の苦しみのために自分の幸せや人生を犠牲にするという考えの虜になっています。これこそが自分の人生の目的になるべきものなのです』と。」(235)

こうして次第に確固たるものになっていった「新しい殉教への衝動」(303)や「殉

¹⁷ これはペルペトゥアの殉教と同じく、限りなく「生への恐れ、死の願望」(147)に近い。

教への憧れ」(同頁)によって、さらには夢で見た自分の原罪を贖うために¹⁸、マリア=ペルペトゥアは身代わりの火刑へと歩いていくのである。

元来、ペルペトゥア殉教伝における幻視は、よく言われるようにグノーシス思想を表現したものであるとか、何かしらの特殊な予言を示したものと解釈すべきものではない。むしろ、ペルペトゥア自身の苦難と救済に対する予見、あるいは見通しと捉えるべきだろう¹⁹。なぜなら、幻視あるいは夢というものは、古代においては、思想ないしは意見の表現手段の一つだったからである²⁰。したがって、幻視は受難の覚悟を強め、死後の救いを確信させることで、殉教への意志を強める機能を果たしているのであって、幻視と殉教への意思を分離するより、むしろ一続きのものとして考える方が殉教伝の理解としては妥当である。しかし、小説の中で双子という二元論的存在を展開させる際、幻視および殉教熱をそれぞれ特化して一人の人物に凝縮させることは、文学の常套的手法と言ってよい²¹。

2. 魔女裁判

この小説の舞台は、前述のように、15世紀末から16世紀にかけての帝国都市アウグスブルクである。そしてその歴史的書割として、フッガー家の繁栄、アウグスブルクの帝国議会におけるルターに対する枢機卿カエタヌスによる審問(1518年)、あるいは皇帝マキシミリアン1世(1459-1519)からカール5世(1516-1556)への皇位継承問題が据えられている。しかしながら、シヨルツのグラミッヒ宛ての私信によれば、「マキシミリアンのアウグスブルク訪問とそのいくつかの発言を除いて、この小説の唯一の歴史的契機は、1511年にルターがローマからの帰り道、アウグスブルクで奇蹟を行ったとされるアンナ・ラマイントを訪ねたということ」²²のみだという。このアンナ・ラマイントなる女性は、1518年に魔女として溺死させ

¹⁸ マリアは夢の中で自分が盗みを行う姿を見、これを自分の罪として捉える(207)。

¹⁹ 豊田：前掲口頭発表。

²⁰ 堤安紀：「ペルペトゥアとフェリキタス — 三世紀初頭、北アフリカの殉教者たち —」In: 『上武大学商学部紀要』第10巻第1号(1998年)、52頁。

²¹ これについては、以下のものを参照。Elisabeth Weber: *Zwillingsgestalten und Zwillingschicksal in der Dichtung*. In: *Archiv für Rassen- und Gesellschaftsbiologie* 30 (1930), S. 265.; 拙論：『本の中のふたごたち8 ふたりのひみつ』In: 『ツインズ』33 (2000年)ピネバル出版、42頁以下；河合隼雄：『子どもの本を読む』楡出版、1990年、183頁以下、および『昔話の深層 ユング心理学とグリム童話』講談社+α文庫、1994年、117頁以下；小島潤子：『双生児の内的世界1 自己と影』文芸社、2003年、140頁以下。

²² Rudolf Gramich: *Formprobleme der Erzählkunst*: Wilhelm von Scholz. München 1958, S.36.

られている。

魔女裁判あるいは魔女狩りは、ドイツにおいては1560年代と1630年代が最盛期だったようだ²³。したがって、この小説の舞台である1500年を挟む時期はその最盛期には該当しないが、魔女狩りの歴史にとって極めて重要な時代に当たっている。すなわち、1518年のルターに対する枢機卿の審問のときにカタリーナ＝ペルペトゥアはすでに修道院長を20年務めているという設定にされているので、そこから逆算すると、マリアの身代わりの処刑は、かの有名な魔女狩り指南書『魔女の槌』（1486年）、あるいはそれに先立つ教皇イノケンティウス8世の教書『限りない愛情を込めて』（1484年）とほぼ同時期である。また、魔女狩りというものはその時代あるいはその地域に何かしら重大な緊張が生じたとき、まるで憂さ晴らしかのように頻発しやすいという特徴があるが²⁴、その意味でも、まさに歴史の大転換期である15世紀終わりの帝国都市アウグスブルクは、魔女裁判の舞台として大いに頷けるものがある。

一般に、魔女裁判は1233年に教皇グレゴリウス9世が出した二通の教書に拠ることが大きく、彼は「説教師修道会」（すなわちドミニコ修道会）にその任務を委ねさせた。それは、ドミニコ会がその設立の目的から異教徒の改宗に情熱を燃やし、禁欲的修道会生活を送っており、この修道会の特性が適任とされたからである。もちろん、フランシスコ会など他の修道会に属する者も異端審問官に任命されはしたが、基本的にはドミニコ会修道士が異端審問官の圧倒的多数を占めていた²⁵。この意味で、『ペルペトゥア』におけるドミニコ会修道士である異端審問官オイタクワスの役割は史実から見ても妥当である。

また、魔女裁判の審理においては、魔女集会（サバト）への参加や悪魔との性交などが拷問・自白の焦点になった²⁶。『ペルペトゥア』では、拷問はカタリーナが意識不明の状態に陥っている間に終了してしまうので、具体的な拷問方法に関しては

²³ イングリット・アーレント＝シュルテ：『魔女にされた女性たち』（野口芳子他訳）勁草書房、2003年、19頁。

²⁴ アン・ルーエリン・バーストウ：『魔女狩りという狂気』（黒川正剛訳）創元社、2001年、116頁；野口芳子：『グリム童話と魔女 魔女裁判とジェンダーの視点から』勁草書房、2002年、iv頁以下；森島恒雄：『魔女狩り』岩波新書、1970年、174頁。

²⁵ 森島恒雄：前掲書、33頁以下。

²⁶ アーレント＝シュルテ：前掲訳書、64頁以下；池上俊一：『魔女と聖女 ヨーロッパ中・近世の女たち』講談社現代新書、1992年、34頁以下；森島恒雄：前掲訳書、87頁以下など。

逐一描写されてはいない。しかし、審問官オイタキウスの予備尋問においては、魔術を使った事実、悪魔との性交、悪魔との契約などについて問われている。これに対してカタリーナは、オイタキウスの予想に反して、真実を告白し始める。

「カタリーナの口から出てきたのは彼にはおなじみの否認ではなかった。彼女は初めはゆっくり詰まりながら、そして次第に熱を帯びつつ告白したのであった。彼女は真実が持つ説得力とともに、率直に、そして臆することなく、今までであったことを簡潔に語っていった。オイタキウスは、そうした出来事存在を信ずべきものとして学んではいたが、彼自身としては一度も見たことはなく、せいぜい拷問の際に恐怖に耐え切れず思わず告白してしまったものを聞いたただけであった。しかし、そうしたものも彼にとってはどれも間違いか虚偽としか思えなかった。」(321)

彼女は恋敵アンナに対する魔術やそれまでに見た色々な幻視について語ったが、その不思議な力の起源については、自然と備わったものであると説明する。その一方で彼女は、悪魔との性交を頑なに否認したので、審問官は拷問を命じざるを得なくなる。

「彼は悪魔がどのような姿を取り得るか、あれこれ可能な限り描写したので、カタリーナはトゥルナーの姿を思わずにはおられなかった。彼女は悪魔との情交についての再度の問いをきっぱりと否認し、諸聖人に呼びかけたので、オイスタキウスは彼女に拷問を告げた。」(323)

ところが、彼女が意識不明の状態で話したファイトやダンサーとの情交についての告白が、悪魔との性交の自白として記録され、最終的な判決の根拠とされてしまうのである。後になってカタリーナはこれらの証言を撤回しようとするが、当時の一般的な魔女裁判同様、そのようなことは認められようもない。

ところで、魔女による魔術の典型的な例としては、薬草などによる治療行為、乳製品に対するもの(牛乳泥棒とバター・チーズ作りの失敗)、病気や死をもたらすこと、あるいは結婚に際して新郎新婦や婚約者たちを病気や不妊にすることなどが知られていたが²⁷、まさにカタリーナによる恋敵アンナへの魔法攻撃はそうしたものの一つであった。また、カタリーナの告発は、アンナの乳母によって噂が広めら

²⁷アーレント＝シュルテ：前掲訳書、25頁以下；ジャン＝ミシェル・サルマン：『魔女狩り』（池上俊一訳）創元社（知の再発見叢書16）1991年、58頁。

れることによって避けられないものとなったが、通常、魔女の告発はこうした何の根拠もない無責任な予断によるものが大半だった（もちろん、カタリーナのケースでは本当に魔術が使われていたのであるが）。そして、いったん噂が広がってしまうと、ペストへの恐怖心も含め、全ての不幸や特異事件の責任が被疑者に押し付けられ、彼女は言わば生贄として火刑台に登ることになった。

聖女なのか魔女なのかの差は紙一重である。癒しや幻視、宗教的エクスタシーなどは、解釈によって信仰による奇蹟とも魔術とも、どちらにでも取り得るからである²⁸。後にカタリーナ＝ペルペトゥアを修道院長に推挙した司教は、実は若き日にカタリーナの魔女裁判に陪席していたが、彼自身は有罪に疑念を持っていた。それどころか、審問官であるオイタキウス自身にも迷いはあった。実は、オイタキウスは一度はカタリーナをフランスの修道院に逃がそうとした。また、今までに自分が関わった魔女裁判は本物の魔女に対するものではなかったのではという自覚もあった。しかし、カタリーナのケースを審問するうちに、今眼前にいる女の力は本物だという興奮が生じた。そして、その彼の姿には魔女裁判につきものの強く死を求めめるサディスティックな喜び（それは大衆だけではなく、魔女裁判に関わった知的エリートとしての神学者、法務官にも強く観察されるもの）²⁹が隠れている。いずれにせよ、ここでわれわれは魔女と聖女の交錯という魔女裁判の急所に突き当たる。そして、そこから双子の持つ二重性・二元性へと引き込まれていくのである。

3. 双子もの

双子の卵性、つまり一卵性・二卵性という医学的知見がどの時代から一般的認識になったかは難しい問題であるが、昔からよく似ている双子と似ていない双子が存在することは知られており、マリアとカタリーナはそのよく似ている類の双子であった。そして、二人の類似性は次のように書かれているほど高かった。

「この双子の類似性は、二人の外見上の類似に、それと同じく際立った内面的類似、つまり感情や意思を表現する際の類似が加わることで、さらに高まった。両親が心がけていたように、気をつけて観察するような場合でも、二人

²⁸ バーストウ：前掲訳書、193頁以下および、池上俊一：前掲書、特に88頁以下。

²⁹ バーストウ：前掲訳書、229頁以下および、池上俊一：前掲書、36頁以下。

一緒になければ区別が出来ないような日々さえあった。身体的な類似を内面的な類似が支えることにより、マリアとカタリーナの類似性は完全なものとなった」(41)。

親でさえ同時に見なければ分からないほど似ている双子は、一卵性双生児の中でも極めて類似性の高い部類に属する。そして、この極めて高い類似性こそがこの小説を成立させる重要なポイントである。すなわち、市書記官ハルトムートが病み上がりマリアをカタリーナと取り違え、甥のファイトに紹介したこと、そのファイトがその後偶然会ったカタリーナをマリアと取り違えたこと、そして、火あぶり直前に入れ違った二人を誰も同定できなかったことがこの小説の要諦なのである。

取り違えという点においては、たとえばペーター・アルテンベルクの『ふたご』(Die Zwillinge)のように、恋人に取り違えられた双子姉妹をユーモラスに書く小品においては、たわいのない笑い話で済む。あるいは、プラウトゥスの『メナエクス兄弟』(Menaechmi)やシェークスピアの『間違いの喜劇』(Comedy of Errors)のように、取り違えによって生じる混乱を笑いつつ、最後には双子同士の再会によってハッピーエンドを迎える微笑ましい作品もある。さらに、ネストロイの『染物屋とその兄弟』(Der Färber und sein Zwillingensbruder)の場合のように、兄弟の窮地を救うために入れ替わった染物屋が本当の自分とは誰なのか一時分からなくなりかけ、その間抜け振りを悲しくおかしく笑うのならまだしも救いがある。しかし、ここでは取り違えによって双子姉妹の運命に亀裂が入り、やがてそれが火刑の薪の山へとつながるのだ。

しかし、この取り違えの責任は間違えた者だけに帰されるものではない。カタリーナとマリアの取り違え(特にファイトの)は、ある面意図的な悪戯心から始まったものだったからだ。すなわち、カタリーナはファイトに初めて会ったとき、自分が妹のマリアと取り違えられたことを自覚していたが、悪戯心からマリアのふりをするという罪作りの行動に出たのである。

「カタリーナは、マリアと勘違いしているわと言おうと思った。しかし、そう言う前にマリアが父親と外出したことを思い出し、とりあえずマリアのままでしょうと考えた。そして、この思いつきは面白い悪戯として魅力的に感じられたのであった。」(78)

この種の入替わりは、一卵性双生児なら誰でも身に憶えのあるものである。それ

は、ここで描写されているように一つは遊戯心から、さらには取り違えを訂正することの煩わしさから来る。ブライテンシュニット姉妹のように極めて似ている双子の場合、取り違えは日常茶飯事なので、事がそう深刻でない場合、適当に入れ替わったままごまかすことは、双子の常識に属する。しかしこの作品の場合、その軽率な「常識」は、その後本気でファイトを愛してしまったカタリーナとマリアを「宿命の道」(65)へと導くのだ。

カタリーナは、やはり悪戯心からファイトと逢瀬の約束を交わすが、彼に再会すると、その恋心は冗談ではなく本物になってしまう。そしてその後、自分の体験とマリアの体験とを意図的に混ぜることで、ファイトが出会ったのは自分だけの虚構を築いていく。こうして、カタリーナは妹マリアから恋人ファイトを完全に奪うのだった。

カタリーナが意図的に入れ替わることでファイトを手に入れたのと同様に、マリアも強い意志を持って死刑囚のカタリーナと入れ替わる。前述のように、カタリーナに幻視の中で聖母マリアによって伝えられていた救済の道は、妹マリアの自己犠牲によるものだったのだ。しかし、どうなのであろうか？ 両親すら間違えることのある、そして二人を「鏡像たち」あるいは「鏡像」と「元像」(54)と呼ぶ言い回しがすっかり浸透していたほど有名な双子姉妹の場合、火あぶり直前の最後の面会に際して、「区別するのは尼僧帽だけだ」(353f.)との認識にある異端審問官たちが、本人確認を十分に行わずに死刑囚を引っ立てていくとは考えられない。また、火刑執行後、完全に記憶を無くした様子のカタリーナ＝ペルペトゥアを怪しむ修道女が皆無だったことも解せない。たとえ、カタリーナ＝ペルペトゥアが過去の幻視によって修道院の建物の構造についてある程度理解していたとしても、修道女たちは、彼女が修道院の生活や同僚たちの記憶をすっかり無くしたことを、姉の処刑のショックによるものとすっかり納得しているのである。これは、ケストナーの『ふたりのロッテ』(Das doppelte Löttchen)においても問題になる「入れ替わりもの」における最大の弱点である。登場人物たちが二人の入れ替わりを疑わない合理的説明が、ある程度説得力のある形で読者に提示される必要がある。したがって、入れ替わり後のカタリーナ＝ペルペトゥアの存在のリアリティが薄れるのは当然と言わざるを得ない。

終わりに

ヴィルヘルム・フォン・ショルツの『ペルペトゥア』には、「魔女裁判」「宗教改革」「帝国議会」「ペスト」などの歴史的的重大事件が織りこまれている。そして、こうした歴史的な背景を大きな枠組みとした上に、幽霊話や不思議な夢の話、あるいは占いや魔法といったオカルト的伏流水で物語を潤し、読者に対する魅力を強く意識した仕上がりとなっている。さらに、各部5章からなる5部構成の合計25章を魔女裁判を中心にしつつ、双子の幼年期のエピソード、ファイトのイタリア修行、カタリーナの恋の行方、そしてカタリーナ＝ペルペトゥアの魔女裁判以後の活躍などをバランスよく配置した筋立ても巧みである。しかし、処刑前の双子の入れ替わりに誰も気づかないという不自然さやマリア＝ペルペトゥアの自己犠牲に到る心的展開の不十分さ、さらにはカタリーナ＝ペルペトゥアの魔女裁判以降における人物描写の不十分さなど、ショルツの代表作とされる割に現在まで読み継がれなかった理由はいくつか考えられる。ショルツが今日の読書界においてほとんど忘れかけられているのは、決してナチズムとの関係（彼は、たとえば1933年10月にヒトラーに忠誠を誓った88人の作家の一人として、ナチに協力した³⁰）のみに帰されることではない。

しかし、『ペルペトゥア』を「双子もの」³¹という視点で見ると、こうした問題点はあるものの、双子の入れ替わりによる自己犠牲・救済を描いた重要な作品と位置付けられよう。この作品においては、ペルペトゥア殉教伝の二つの柱であった幻視と殉教熱という点に関しても、魔女裁判における聖女と魔女の二重性という点に関しても、双生児の持つ二重性・二元性に問題が収斂されているからである。本論で詳しく検討できなかった双子の対偶者間および両親との心的関係、夢の役割とその意味、さらには影の問題などは今後の研究に委ねたいと思う。

³⁰ Joseph Wulf: *Literatur und Dichtung im Dritten Reich. Eine Dokumentation*. Gütersloh 1963, S. 96.

³¹ 双子が登場する文学作品（日本で出版されているもの中心）に関しては、以下のウェブ・サイトを参照：<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~germ/member/lehrer/megumi/booklist.html>

„Perpetua“ von Wilhelm von Scholz

SHIMURA, Megumi

Luigi Gedda hält in seiner Monographie „Twins in History and Science“ (1961) den Roman „Perpetua. Der Roman der Schwestern Breitenschnitt“ (Leipzig 1926) von Wilhelm von Scholz (1874-1969) für „a remarkable description of the minds of two twins in a story where mystical happenings and occult forces play a leading role.“ Dieser Roman behandelt das merkwürdige Schicksal der einander sehr ähnlichen Zwillingsschwestern um die Jahrhundertwende im 15/16. Jh. und erzielte hohe Auflagen. Während die eine als Äbtissin und Heilige hoch verehrt wird, wird die andere als Hexe auf den Scheiterhaufen kommen. Um dem Werk näher zu kommen, interpretieren wir den von den Zeitgenossen viel gelesenen Roman anhand dreier Leitfäden: „das Martyrium von Perpetua“, „der Hexenprozess“ und „die Zwillinge“.

Bei dem Scholzischen „Perpetua“ handelt es sich nicht um die direkte Nacherzählung des Martyriums von Perpetua, die im 3. Jahrhundert in Karthago als Christenkandidatin hingerichtet wurde, sondern um die freie Entfaltung der durch die Martyriumsgeschichte hervorgerufenen „Imagery“. In der „Passio Sanctarum Perpetuae“ spielen „Vision“ und „Verlangen nach dem Martyrium“ die Schlüsselrollen, die bei dem Roman „Perpetua“ in jeder der beiden Hauptfiguren, Katharina und Maria, getrennt und raffiniert dargestellt sind. Maria also, die an die Stelle ihrer Schwester tritt und sich auf dem Scheiterhaufen opfert, verkörpert das heiße Verlangen nach dem Märtyrertod. Katharina dagegen, die später als Perpetua=Katharina die Stadt Augsburg vor der Pestilenz rettet, vollbringt anhand der Visionen ihre Wundertaten. Da in der Antike die Träume und Visionen Ausdrucksmittel waren, mit denen man Gedanken oder Meinungen zum Ausdruck bringt, sollten wir bei der „Passio Sanctarum Perpetuae“ die beiden Elemente eher als untrennbar betrachten. Die vier Visionen, die Perpetua gesehen haben sollte, lassen sich als Ausdrucksform ihrer festen Intention zum Märtyrertod verstehen. In der Erzählstrategie des Romans sind jedoch das Verlangen des Märtyrertodes und die Vision auf jeden Teil des Zwillingspaars konzentriert, ebenso wie es bei den anderen Beispielen in der Literaturgeschichte der Fall ist, in denen Zwillinge vorkommen und die jeweils gegenüberstehenden Eigenschaften vertreten.

Wie bei der Judenverfolgung brachen die Hexenprozesse des Öfteren aus, wo und wann immer die gesellschaftliche Situation in eine Krise geriet. In dieser Hinsicht ist die Schaubühne des Werkes, die Stadt Augsburg in der Reformationszeit, besonders geeignet, einen Hexenprozess zu schildern. Nicht nur die Rolle des dominikanischen Inquisitors Eustachius, sondern auch das ganze Gerichtsverfahren, wie Anklage, Verhöre oder Folter, basiert auf der geschichtlichen Wirklichkeit. Wie historische Studien zeigen, dass bei dem authentischen Hexenprozess die Differenz zwischen einer „Hexe“ und einer „Heiligen“ willkürlich war, ist auch dem Inquisitor Eustachius bewusst, dass er viele Unschuldige auf den Scheiterhaufen geschickt hat, und dass die angeklagte Katharina eine sonderbare begnadete Kraft hat. Aber er kann den Stimmen der verdächtigenden Leute nicht widerstehen und anhand der wiederholten Verhöre fällt er ihr Todesurteil. Damit stoßen wir auf eine Kreuzung bei dem Hexenprozess, auf der sich die Hexen und die Heiligen eng überschneiden.

Die Breitenschnitt-Schwester sind einander so ähnlich, dass auch die Eltern sie manchmal nicht unterscheiden können, wenn ihre beiden Kinder nicht zusammen sind. In dieser extremen Ähnlichkeit besteht die Antriebskraft des Werkes. Sie gibt den Anlaß zum Missverständnis, in welchem der Stadtsekretär Hartmut und sein Neffe Veit Katharina mit Maria verwechseln. Wenn auch das Schicksal der Zwillingschwester wegen dieses Verwechselns ein tragisches Ende nimmt, sind Hartmut und Veit nicht allein daran schuld. Denn es ist Katharina, die sich beim ersten Verwechseln mit Absicht bzw. zum Spaß den Anschein gibt, dass sie Maria wäre. So ein Sich-für-den-anderen-Ausgeben tun allerdings fast alle eineiigen Zwillinge zumindest einmal in ihrem Leben. Aber diese scherzhafte Tat von Katharina bringt ihre Schwester schließlich zum Opfertod. In diesem Verwechseln, das die unheimliche Ähnlichkeit verursacht, steckt jedoch auch die Schwäche dieses Werkes: wie bei den anderen literarischen Produktionen, in denen Zwillinge erscheinen, muss das Verwechseln eine gewisse Notwendigkeit und Glaubwürdigkeit vermitteln. Trotz seines hohen künstlerischen Ranges gelingt das z.B. bei dem weltweit beliebten „Doppelten Lottchen“ von Erich Kästner auch noch nicht genug, denn die Zwillingeltern könnten normalerweise ihre Kinder sofort identifizieren, wenn ihre Kinder plötzlich den anderen Charakter zeigten. So ist es nicht plausibel, dass der Inquisitor und die Schergen die zum Tod Verurteilte herausholen, ohne sie genau zu identifizieren, denn sie sind sich ihrer Ähnlichkeit völlig bewusst. Infolgedessen hat Katharina=Perpetua nach dem Opfertod ihrer Schwester nur eine wenig reale Daseinskraft.

Trotz der gut durchdachten Konstellation und der reizhaften Handlung/Nebenhandlungen findet heute der Roman „Perpetua“ nur eine geringe Leserschaft. Das hängt nicht nur mit der Mitwirkung des Autors im nationalsozialistischen Regime zusammen, sondern auch mit dem künstlerischen Wesen des Werkes. In Hinsicht auf die „Literaturgeschichte der Zwillinge“ dürften wir jedoch das Hauptwerk von Scholz für einen sehr wichtigen Versuch ansehen, in dem die Doppelheit des Martyriums von Perpetua („Vision“ und „Verlangen nach Märtyrertod“) sowie des Hexengerichts („Hexe“ und „Heilige“) in der dualistischen Problematik der Zwillinge kontrahiert sind.